

選者 川口孤舟

投句・選句 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 熊谷くにお 後藤とみ子 小早健介
 在間千恵 佐藤ただしげ 高橋康敏 田島正己 土谷堂哉 豊田ゆたか 西澤國護
 長谷見びん 福島正明 古川百合子 古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也
 山内天牛 渡邊盛雄
 選句のみ 伊賀山そらお、梅崎くすを 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆 早川允章
 山田けい子 山本三恵

【互選句】 ◎は孤舟選者の選 選者欄の○は選者の「天」

十四点

みどり児の丸い欠伸や小春風

孤舟

(そ・○くす・五・と・た・孝・清・康・己
ゆ・け・亜・天・三)

十二点

縄跳びの子等残照を使ひ切り

孤舟

(くす・○く・○五・○康・堂・○び・○允・
百・○啓・○正・け・三)

十一点

調弦のごと雪吊の組み上がる

孤舟

(紀・五・健・清・己・堂・國・び・百・
○昇・啓)

十点

細き指冬至南瓜に立向かふ

盛雄

(紀・忠・く・五・千・○孝・び・百・
け・亜)

八点

◎賀状書くこの万年筆五十年

健介

(紀・忠・孤・千・國・隆・允・盛)

◎煤逃げの親子床屋で鉢合せ

康敏

(紀・孤・五・○と・○堂・昇・啓・
○三)

◎時雨るるや人力車夫の雨合羽

啓子

(紀・くす・孤・千・清・昇・け・天)

七点

鯛焼きを英語で売買人形町

正明

(忠・健・龍・堂・隆・天・盛)

◎旅路来て一期一会の囲炉裏端

昇

(そ・孤・た・清・康・國・允)

曰くあるマフラーばかり失くしけり

亜也

(紀・忠・孝・○龍・康・堂・隆)

六点

◎小話で始まる句会年の暮

五郎太

(紀・忠・孤・く・と・隆)

◎天上に身動きもせず寒の星

昇

(そ・孤・孝・龍・啓・け)

長旅を終へて袖湯に溶くるまで
ベンジンの香ふと懐かしき懐炉かな

昇 亜也

(紀・清・允・百・啓・盛)
(紀・忠・孝・己・正・昇)

五点

薪はぜる音合の手に炉辺話
酌み交わす九谷の猪口や忘年会
北風の坂吹き上ぐる港町
山の湯の羽化登仙や雪見酒
忘れたきこと浮き沈みゆく柚子湯かな

とみ子
ゆたか
びん
昇
盛雄

(そ・己・堂・百・昇)
(紀・く・た・正・昇)
(○そ・紀・健・國・亜)
(紀・健・允・亜・○盛)
(紀・と・孝・ゆ・び)

四点

カードキー挿し極月の扉開け
新しき聖衣の司教冬のパリ
合格の嬉しき知らせ冬椿
燃え盛る炎と紛う冬紅葉
◎登山口竿もて塞ぎ山眠る
歌舞伎座の総見席に年惜しむ
はたき持つ和尚に歳暮渡しけり

孤舟
五郎太
全
健介
とみ子
全
康敏

(紀・五・健・康)
(紀・と・啓・天)
(た・隆・允・天)
(紀・く・己・ゆ)
(孤・千・康・清)
(紀・忠・く・正)
(允・昇・盛・天)

三点

舞妓の番傘下京は雪となり
雪催古き家並の堅固なる
短日や遺影の母に「帰ったよ」
来客の途絶えて久し冬ざるる
友黄泉へさみしき師走寒さ沁む
銀杏濃く並木の奥に青い空
山宿の扁額解けず年詰まる
芋名月語れば尽きぬ宰相論
今持てる物で満足クリスマス
晴れ渡り晴れ渡りけり師走空
祖母の味再現せんと鴨の汁

孤舟
とみ子
堂哉
ゆたか
國護
全
びん
全
正明
規雄
亜也

(そ・康・天)
(くす・び・亜)
(紀・己・○び)
(くす・び・正)
(そ・堂・ゆ)
(千・た・己)
(紀・亜・三)
(○健・啓・隆)
(健・ゆ・隆)
(く・と・百)
(紀・と・國)

二点

裏山の柿狙ひをる鳥数多
菰卷樹や松が腹巻きをしてるやう
義士の日や刻々変はる雲の形
風に舞ふ落葉もゆかし乾門
何せむに落葉けちらし鳩猛進
てっぺんにかたまる五つ木守柿
オペラ観て感慨はてなき暮の街
冬夕焼富士おとこぶり一段と
木星や衝の輝き冬夜空

紀久男
忠彦
くにお
とみ子
千恵
全
ゆたか
百合子
亜也

(龍・國)
(紀・盛)
(五・け)
(た・三)
(くす・け)
(紀・ゆ)
(紀・國)
(紀・ゆ)
(龍・百)

一点

◎凍雲に蔵王山頂白化粧

スルメ炙る薪ストーブが懐かしい

一年の知人の死知る十二月

冬の夜拍子木音通り過ぎ

冬ざれの圓(↓園)に真紅の梅擬

北浜の風に舞ひ飛ぶ冬鷗

寒風に肩を狭る埋立地

◎カサコンと舞う落葉より微香かな

時雨降る嵯峨野にデビュー「果蔬図巻」

日記買う十年無理と五年用

◎廻りくる母の供養や三歳(みとせ)の冬

顔見世や花街総見艶やかに

木々の枝残る葉もなし冬茜

白浪や思いがけない訃報来る

愛でおれば家主手折るや石菝の花

掛軸に先祖偲びつ師走酒

賀状書く毎年減るも心込め

早明戦ラガーぶつかり冬の汗

能登の人恙なしかと賀状書く

冬の夜のおどろおどろし日本海

風強く鴨の合戦浚ひゆく

小春日や天蓋開けてスポーツカー

冬陽浴び客もまつたり世田谷線

境内の落葉掃除や麻袋

松葉蟹食いに息子は出雲路へ

真似事のヨガ体操や冬うらら

忠彦

全

全

全

くにお

全

全

千恵

全

全

ただしげ

全

全

正己

全

ゆたか

堂哉

全

國護

全

百合子

昇

全

全

全

啓子

盛雄

(孤)

(紀)

(正)

(正)

(三)

(清)

(垂)

(孤)

(龍)

(紀)

(孤)

(紀)

(くす)

(た)

(千)

(紀)

(孝)

(龍)

(盛)

(び)

(三)

(千)

(紀)

(び)

(紀)

(紀)

(紀)

【句評・短評】

十四点句

みどり児の丸い欠伸や小春風

孤舟

五郎太さん・・・可愛い口を大きく開ける、のどかな景色。

とみ子さん・・・丸い小さなお口が可愛らしいです。

ただしげさん・・・赤ちゃんの屈託のない欠伸、微笑ましい。

康敏さん・・・小春日の赤ちゃんの欠伸。小さな口をまん丸く開けて、可愛いですね。

亜也さん・・・「丸い」が赤ちゃんの口や表情を捉えて絶妙。

天牛さん・・・あとは何でも良い。丸い欠伸が全部です。

十二点句

縄跳びの子等残照を使い切り

孤舟

くにおさん・・・日が沈んでもまだ縄跳びにに興じている元気な子らの姿が目には浮かぶ。縄跳び、特に「大縄跳び」は今の街中では殆ど見られない。懐かしい景です。

五郎太さん・・・元気な子供らの、弾むような縄跳びの音がしていたが、はや日も落ち、暗くなった。

「使い切り」が巧みです。

康敏さん・・・昭和期には道路で女兒達が暗くなるまで縄跳びやゴム飛びに興じていた。中七・下五の表現が秀逸。

堂哉さん・・・残照を使いきり で頂きました。

びんさん・・・往時は男の子ならベイゴマか凧揚げか。今はその影もなし。「残照を使い切り」が見事です。すね。

允章さん・・・残照を使い切り の表現がとても良い。

百合子さん・・・縄跳びに夢中になってまだ見えるよまだ見えるよ・・・子等の息遣いまで聞こえてきそうでした。私もそうでしたから。

啓子さん・・・かつてはよく見られた景。日が暮れるのを、残照を使い切ると発想されての下五。夕陽の中を遊ぶ子等の心の動きまでもがこの下五で活き活きと感じられます。

十一点句

調弦のごと雪吊の組み上がる

孤舟

五郎太さん・・・芸術的に縄を張る様を上手く捉えられています。

堂哉さん・・・喩えが抜群！

百合子さん・・・雪吊から調弦をイメージするなんて！

昇さん・・・ぴんと張られた雪吊。調弦の喩えが絶妙。美しい音色が伝わって来そうです。

十点句

細き指冬至南瓜に立向かふ

盛雄

五郎太さん・・・私は幾つにも切り分けられたカボチャを買います。

千恵さん・・・南瓜を切る時は慎重に怪我をしないよう切れる包丁を使います。その心理状態が立ち向かふという表現に現れています。

孝岳さん・・・運を呼ぶためにか弱き女性の身ながら、堅い冬至南瓜を料理しようとする気概が感じられて見事。「細き指」と「立ち向かふ」が対称的で良い。

百合子さん・・・私の指は太いですが、南瓜に立ち向かうこの句の意味に納得！

亜也さん・・・「立ち向かふ」が効いている。作者の目線にある奥様への愛。

八点句

賀状書くこの万年筆五十年

健介

孤舟選者・・・*キミ*より万年筆の方が、深い思いを込めた字が書けそうだ。

千恵さん・・・長い間使っている万年筆への愛情が溢れていますね。

隆さん・・・「書き古し万年筆で賀状書く」でも。

盛雄さん・・・小生のは西ドイツ製でした。

煤逃げの親子床屋で鉢合せ

康敏

孤舟さん・・・煤逃げの逃走先（？）が同じ床屋とは何んとバツの悪いこと。
五郎太さん・・・面白い季語、ちよつと落語風です。
とみ子さん・・・煤逃げに親子が登場したのが、なにやら愉快でした。
堂哉さん・・・特選。まるで落語ですね！

三恵さん・・・落語のネタに出てきそうな、コミカルな場面。果たしてこの後はいかなる展開になったのか、想像してしまいますね。実体験でしょうか。

時雨るるや人力車夫の雨合羽

啓子

孤舟選者・・・走行中に時雨に逢い、客に雨傘を渡すと共に、自分も雨合羽を纏う。
千恵さん・・・車夫とは体力のいる仕事、雨の中頑張っている車夫へのエールのような。。
天牛さん・・・晴れても雨でも人力車を走らせねばならぬ。車夫は準備万端合羽を用意しています。

七点句

鯛焼きを英語で売買人形町

正明

隆さん・・・「外人も鯛焼き食むや人形町」でも。
天牛さん・・・私も人形町で鯛焼きを買ったことがあり、あんな処まで外人観光客が来ているのかと驚きました。

旅路来て一期一会の囲炉裏端

昇

孤舟選者・・・旅館の夕食時、囲炉裏端の食卓を囲んで、ふるさと自慢に花が咲く。
ただしげさん・・・心温まる、旅の一コマですね。

康敏さん・・・民宿の囲炉裏をかこみ談話する旅行客達、中七の「二期一会」が効いている。
曰くあるマフラーばかり失くしけり

亜也

龍平さん・・・真知子晩年の嘆き へあら あの日マフラー 何処に仕舞ったのかしら〜
忘却とは忘れ去る事なり

康敏さん・・・日により寒暖の差が激しい、うっかりとマフラーを何処かへ置き忘れてきた。妻の編んだもの、張り込んで買ったバーバリー…と。

堂哉さん・・・正にこの通りです！

隆さん・・・高校入学に父が買ってくれたセイコーファイブは何処へ。

六点句

小話で始まる句会年の暮

五郎太

孤舟選者・・・国護さんの軽快な創作小話が、納め句会に華を添えてくれた。
とみ子さん・・・年の暮の句会への挨拶句としていただきました。

隆さん・・・「小話で口火を切るや暮れ句会」でも。

紀久男・・・「小話」は「小嘶」の方が雰囲気があって佳いと思えますが。

天上に身動きもせず寒の星

昇

孤舟選者・・・あまりの寒さに、星たちが凍てついて動けない。

長旅を終へて柚湯に溶くるまで

昇

百合子さん・・・疲れた時のお風呂は最高、疲れがお湯に溶けてゆくぅー。
啓子さん・・・柚湯に溶くる・旅も愉しかったが、何と云っても家。言葉の選択が絶妙です。
盛雄さん・・・「柚湯に溶くるまで」さぞ疲れが薄らいだでしょう。

五点句

薪はぜる音合の手に炉辺話

とみ子

百合子さん・・・薪はぜる音を合の手とするとほびつたりの表現ですね。

酌み交わす九谷の猪口や忘年会

ゆたか

ただしげさん・・・九谷焼の猪口で忘年会、良いですね。

北風の坂吹き上ぐる港町

びん

亜也さん・・・函館をイメージして如何にも風情と思つたものの、日本海側の由で、ハテどこ？

山の湯の羽化登仙や雪見酒

昇

亜也さん・・・要は「天国、天国」と呟く気分。「羽化登仙」の気取りがいい。

盛雄さん・・・理想郷ですね。うらやましい限りです。

忘れたきこと浮き沈みゆく柚子湯かな

盛雄

とみ子さん・・・忘れたきことを柚子に託してさっぱりと一年を終えたい気持ちですね。

四点句

カードキー挿し極月の扉開け

孤舟

五郎太さん・・・ホテルでしょうか、ちよつと無機質で寒い年の暮れです。

康敏さん・・・ホテルの一室のドアを開けると、そこは十二月の世界。クリスマスツリーが点灯し、

サンタさんをお願いしていたプレゼントが。

新しき聖衣の司教冬のパリ

五郎太

とみ子さん・・・再建されたノートルダム寺院の内部を見ているような気分になりました。

天牛さん・・・いい時にパリを訪ねられましたね。信心のおかげでしょうか。

※五郎太さん(自解) ノートルダム大聖堂の再開の日、司教らが白地に赤や緑の刺繍のある新しい

式服を着けていました。フランスのデザイナーである76歳のカステル・バジャックの意匠の由。

合格の嬉しき知らせ冬椿

五郎太

ただしげさん・・・早々と合格の知らせ、おめでとうございます。

隆さん・・・多様な入学選抜が増えてきた。

天牛さん・・・人生の節々にある合格は非常に重要な知らせです。冬椿がきいていますね!!

※康敏さん・・・合格(春)、冬椿(冬) 季重なりです。

登山口竿もて塞ぎ山眠る

とみ子

孤舟選者・・・「熊出没注意」の看板と共に竿で登山口が閉鎖され、山は長い眠りに着いた。

千恵さん・・・入口を竿で塞ぎ来年まで来ないでねと山は眠りに入る。その瞬間を切り取りました

ね。

康敏さん・・・「登山口」は夏の季語だが、冬は竿で閉ざされ入山禁止。主季語は「山眠る」で、

季重なりは気にならない。

はたき持つ和尚に歳暮渡しけり

康敏

天牛さん・・・うまい具合に和尚がはたきを持っていましたね。いいタイミングでした。

盛雄さん・・・菩提寺の和尚と仲良くするのはとても良いことです。

三点句

舞妓の番傘下京は雪となり

孤舟

康敏さん・・・破調の句だが、凡兆の「下京や雪積む上の夜の雨」が自然と浮かんで来た。

天牛さん・・・置き屋から出てきた舞妓が突然の雪に番傘を開いたのでしょうか。

雪催古き家並の堅固なる

とみ子

亜也さん・・・雨催と同様に口語では使われなくなっていますが、大事にしたい日本語。

短日や遺影の母に「帰ったよ」

堂哉

びんさん・・・レンブラントに「放蕩息子の帰郷」と言う大作がありましたね。しみじみとした福音書に基づいた物語。許された息子・・・いや、そんな筋書きより「帰ったよ」の一言がいいですね。

友黄泉へさみしき師走寒さ沁む

國護

堂哉さん・・・同期入社でコーラス活動の苦楽をともにした友を亡くしました。ガツカリです。

※康敏さん・・・季重なりです・・・師走と寒さ

銀杏濃く並木の奥に青い空

國護

千恵さん・・・大銀杏が空を覆うくらいにそびえていて蒼い空は遠くにしか見えない。でも黄色と青色のコントラストが良いですよ。

ただしげさん・色づいた並木と空の青さ、風景が目には浮かびます。

山宿の扁額解けず年詰まる

びん

亜也さん・・・草書なのか、書かれていることを判読せんとする性癖に親近感をもった次第。もっとも山宿にそんな小難しい額なんてありますかね。

芋名月語れば尽きぬ宰相論

びん

健介さん・・・トランプ、プーチン、石破……宰相の話題は事欠きません。名月を仰ぎながら、語り尽くしましょう。

隆さん・・・格言「組織はトップ以上には大きくなれない」「名月を語れば尽きぬ芋宰相」でも。

※句会にて・・・芋名月となると、どんなに遅くも晩秋。今月12月の句としてはさすがに季語が合致しないでしょう。

今持てる物で満足クリスマス

正明

隆さん・・・幸せ感が漂ってくる。

晴れ渡り晴れ渡りけり師走空

規雄

百合子さん・・・師走のぴーんと張りつめた空気の晴れの日はまさしく・・・

祖母の味再現せんと鴨の汁

亜也

とみ子さん・・・料理のお上手なお祖母さまの隔世遺伝ですから きつと美味しいお吸物でしょうね。

二点句

裏山の柿狙ひをる鳥数多

紀久男

龍平さん・・・コリヤ 油断がナラネエー

菰巻樹や松が腹巻きをしてるやう

忠彦

盛雄さん・・・中七の「松が腹巻」が愉しい句に仕上げました。

義士の日や刻々変はる雲の形

くにお

五郎太さん・・・討ち入りの日。そう思ってみると雲が色々な形に変わっていく。

木星や衝の輝き冬夜空

亜也

龍平さん・・・巨大な星 二本の太い縞 どんな役割を担っているのだろうか？

百合子さん・・・12月上旬にニュースで「今日は木星がはっきりと大きく見えます」と聞いたのですが、その意味がこの句でくつきりとなりました。

一点句

凍雲に蔵王山頂白化粧

忠彦

孤舟選者・・・遅い冬の到来だったが、ようやく雪が降り、スキー場も整備された。

冬ざれの圓(↓園)に真紅の梅擬

くにお

※圓は「園」に読みかえて採られています。(作者からも変換間違いの報がありました)

※くにおさん(自解)・・・季重りの句になりましたが、「梅擬」は秋の季語ながら、晩秋と初冬

の景を詠む上では避けられないと思っています。

寒風に肩を狭る埋立地

五郎太

亜也さん・・・荷風の荒川放水路沿いの散歩を髣髴。なお、「すぼめる」なら、表記は「窄める」が

ベター?

カサコンと舞う落葉より微香かな

千恵

孤舟選者・・・落葉の舞う音だけでなく、「香」まで感じ取った感性は見事。

廻りくる母の供養や三歳(みとせ)の冬 だしげ

孤舟選者・・・厳寒の日に亡くなった母の3回忌。頻りに母に逢いたくなる。

白浪や思いがけない訃報来る 正己

ただしげさん・同じことが有ったので、身につまされます。

※康敏さん・・・無季語です。「冬浪や思ひがけなき訃報あり」では。

愛でおれば家主手折るや石露の花 堂哉

千恵さん・・・ご自宅の庭の石露の花を通行人に褒められて差し上げたのでしょうか? 心の交流良

いですね。

早明戦ラガーぶつかり冬の汗 國護

龍平さん・・・久しぶり こちらも 汗だくでした

※康敏さん・・・ラガー(冬)、冬の汗(冬) 季重なりです。

能登の人恙なしかと賀状書く 昇

盛雄さん・・・二重災害、惨状に自分を置き換えてみれば、正月も無いだろう。

小春日や天蓋開けてスポーツカー 啓子

千恵さん・・・いくらぼかぼか日和でも風は冷たいはず。やせ我慢して恰好つけてる???



【次回青葉会予定】

2025年 一月二十三日(木) 午後一時〜四時半 しゃれなあと6階 ビーナスの間

①出句②案内:句会③出席の方は当季雑詠五句 ④投句の方は二句を目処にお出しく下さい。

⑤出句⑥切り日程:令和七年 一月十九日(日)午前中



【青葉会報】

一、 令和七年が明けました。皆さまにはお変わりなくお元気で新たな年をお迎えになられたこととお慶び申し上げます。

令和六年の師走、十九日に青葉会納会、句会終了後、忘年会を催しました。句会ご出席者は

十三名、そこに忘年会に駆けつけられたお三方が加わり十六名の忘年会となりました。

句会は世田谷区施設のしやれなあどの会議室、初っ端は、国護さんの「小話(こ自身作の小噺)」のご披露で一氣に和やかに。いつもより少し多いメンバーでの句会は、いつもの五郎太さんの司会進行で、皆さまの率直な明るい披露で賑やかな納会となりました。その後の忘年会は、句会場の並びにある銀座アスタ―三軒茶屋賓館。句会が終了してすぐに会場を開けてもらい、個室が取れずレストランススペースを使うことを了解してありましたところ、一般客は入れずに青葉会だけのお部屋の設えをして下さり、気楽にゆったりと皆さまと歓談でき、お席を入れ替えしつつの良い忘年会となりました。

二、 佳句の多かつた師走の句会結果は、ご覧のように、孤舟選者の五句ご出句戴いたうちの三句句までもが、十四点、十二点、十一点と年末の会報巻頭を飾り、流石の選者！と感服致しました。またこのところ上位入りを常とされている盛雄さんが十点、健介さん、康敏さんと啓子さんが八点と続いております。

茲に本年令和七年の皆さまのご健吟をお祈りいたします。

三、【孤舟選者近詠】

盃に浮かべ飲み干す冬の月

有り丈の陽を万遍に干大根

冬北斗別れはある日突然に

広重の橋の驟雨や初時雨

一穢なき宙の大河を鷹の群れ

【関係者近詠】

香炉振る神父は若し聖夜ミサ 康敏

作者(青葉会・康敏さん)談：私はカトリック信者ではありませんが、近所のスペイン系の修道院の聖夜ミサに信者の方と列席しました。司祭は中年の太ったスペイン人の神父ですが、乳香の香炉を振るのは若い神父。近くに座っている女性たちは「若くてあんなにハンサムなのに神父さんとは、もったいないわね」とヒソヒソ囁いていました。与謝野晶子の心境ですね。

☆

☆

※関係者近詠は、青葉会にご参加戴いている方、元青葉会でいらした方々などを関係者とさせていただきます。折に触れて作句された句を、編集者の目に入った時にお願ひして掲載させていただきます。

令和七年の一月句会報から、只今お休みしている「森の座」の方々の句も、世話人の紀久男さんとも相談し、可能な限り毎月頂戴して本欄に掲載させていただきます。

(了)

令和七年一月吉日